

## 南アフリカ共和国の大学事情 —特にウィッツ大について

石原舜三<sup>1)</sup>

1998年の夏に南アフリカ共和国に滞在する機会があり、この国の地質学部について知ることが出来たので、その旅行で見聞したことを書き留めてみたい。

この国には理学部に地球科学を持つ大学は11校ある。最大都市ヨハネスブルグ地域にはウィットウォーターランド大学(略称ウィッツ大)、ランドア

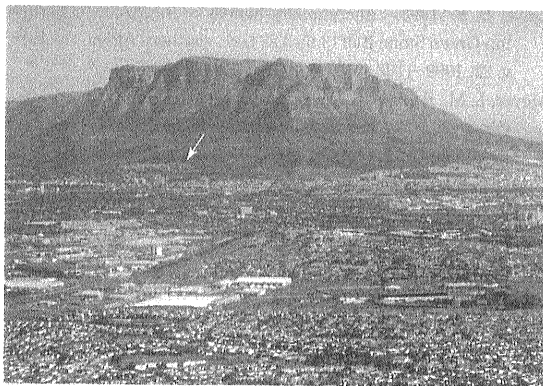


写真1 ケープタウン大学(1)北北東に山稜を持つテーブル山地の東麓に造られている(矢印)。

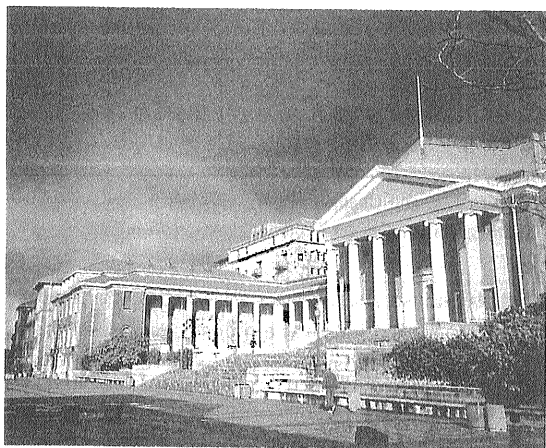


写真2 ケープタウン大学(2)キャンパスの中心を占める大学本部棟。

フリカーンズとプレトリア大、ケープタウンにはケープタウン大(写真1-3)、ウエスタンケープタウン大、その直ぐ東方のステレンボッシュにはステレンボッシュ大(写真4-6)、更に東へ海岸地帯のポートエリザベスにはポートエリザベス大、グラハムズタウンのローズ大(写真7-9)、ダーバン地域にはダーバン大とナタル大、内陸へ入ってブロンフォンティンにはフリーステイツ大がある。これらのうちウィッツ大とケープタウン大が大きく、また良い大学とされている。キャンパスは写真で分かるように、ヨーロッパの雰囲気を持つが、歴史が浅いためか重厚というよりも明るく感じられた。

スタッフの規模はウィッツ大が鉱床地質研究所(1958年創立, Economic Geology Research Unit)を含めて教授5名, 準教授1名, 上級講師4名, 講

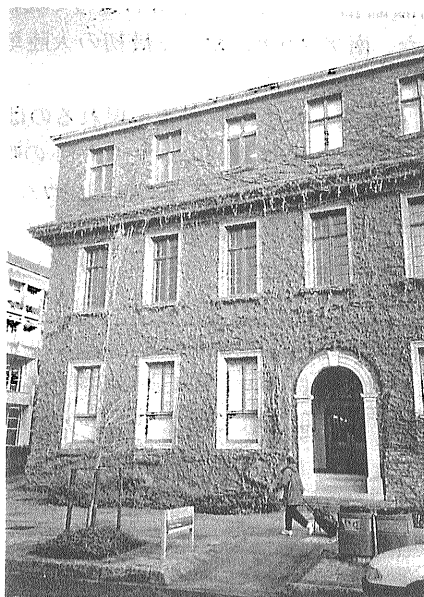


写真3 ケープタウン大学(3) 蔦に覆われた3階建ての地質学科棟。

1) 地質調査所 顧問

キーワード: 南アフリカ共和国, 地質学科, ウィッツ大



写真4 ステレンボッシュ大(1)この街はケープタウンの東方約50km, ワインランドの中心にある。この大学では農業分野の研究が盛んである。

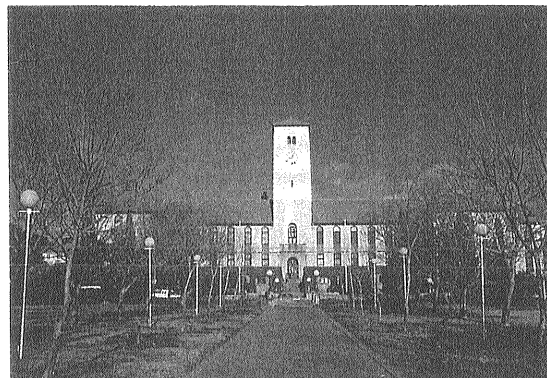


写真7 ローズ大(1)大学の正面。大学の名はダイヤモンド採掘で富を築き、教育・文化面で社会的に貢献したセシル・ローズ(S. Rhodes)にちなむ。かつての国名、ローデシアの由来と同じである。



写真5 ステレンボッシュ大(2)地質学科の入り口。地質学科は小さいが、質は高く、アルミナ指数で名を馳せたS. J. Shandはスコットランドから当地に就職して教鞭をとった。



写真8 ローズ大(2)地質学科棟3階から見たコロニアル風の回廊と中央図書館。

**A university is not a lecture theatre,  
or a library or a laboratory;  
it is not a building or a place at all;  
its essence is a frame of mind....  
....where two or three are gathered  
together in the name of knowledge,  
there is a university.**

**S. James Shand  
1916**

写真6 ステレンボッシュ大(3)S. J. Shandの名言は今も教室に掲げられている。

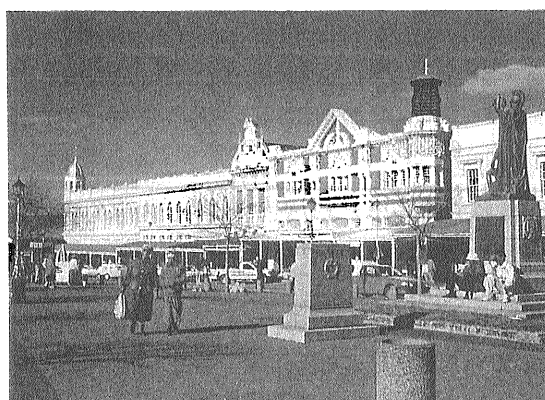


写真9 ローズ大(3)グラハムズタウンはイギリス移民の基地であったが、現在では教育・文化都市に変貌している。

師4名, ポスドクほか5名, 合計20名である。サポート部門としてはテクニシャン10名, 秘書ほか7

名, 合計17名である。ケープタウン大は教授4名, 準教授4名, 上級講師10名, 研究フェロー7名, 合

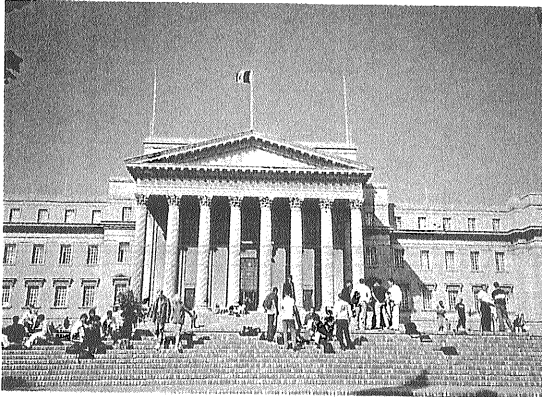


写真10 ウィッツ大(1) 東キャンパスの中心にある大学本部棟。



写真12 ウィッツ大(3) 建物の一部にある博物館と会議用のテーブル。



写真11 ウィッツ大(2) 地質学科と地球物理学科の合同棟の正面。

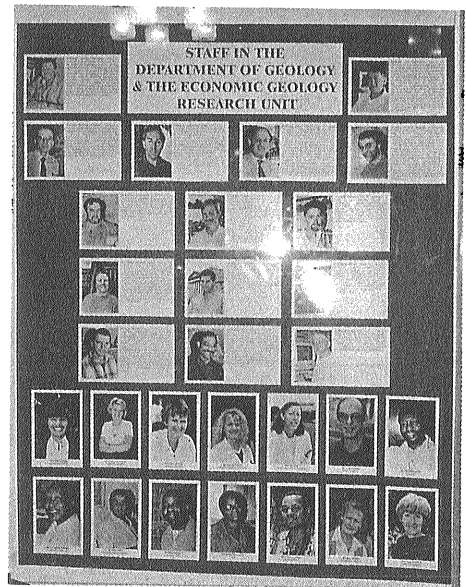


写真13 ウィッツ大(4) 地質学科の職員を紹介するボード。教官には研究紹介がつく。新入の1, 3年生のみならず、私のような訪問者にも顔と研究略歴が分かって非常に便利であった。

計25名でウィッツ大よりやや大きい。内容的にはウィッツ大の5教授のうち4名が鉱床・岩石学か鉱山を専攻しており、ここでは実社会との関係を重視するのに対し、ケープタウン大がサイエンスを主テーマとしている特色がある。

ウィッツ大の前身は1870年にキンバリーパイプが発見され、ダイヤモンド鉱業が必要とする人材を供給する為に1896年にキンバリーに設立されたSouth African School of Minesである。これは1886年のヨハネスブルグ近郊のウィットウォーターランド含金礫岩の発見によりヨハネスブルグに移さ

れ、それは1922年に総合大学に昇格した。大学は道路を挟んで東西キャンパスからなり、中心街の直ぐ北の便利な所にありニューヨークのコロンビア大学を思わせるが(写真10)、危険が一杯のようで校門近くで私が換金した銀行では、出口で人を一端プールして出す特殊なドアが付けられていた。また、キャンパスを一步出ると恐喝・強請に注意するよう再三の注意を受けた。

大学の配布資料Facts on Wits 1998によると現

在の学部数8(建築, 美術商業, 教育, 工学, 健康科学, 法学, 経営, 理学), 学科数99, 教官数996人(パートタイム114人), 事務官1,204人(同148人), 図書司119人(同20人), 技官306人(同36人), サービス部門596人(同84人), 合計3,221人(同402人)である。

学生数は総計17,835人, うち黒人が8,638人, 理学部は2,395人(黒人1,125人)である。黒人の比率は1984年14.1%, 1988年20.1%, 1992年29.1%, 1994年(選挙の年)35.7%, 1995年40.2%, 1997年48.2%と急速に上昇している。しかしキャンパスを歩く限り, 既に黒人が50%を越えているのではないかとの印象を受けた。

地質学科はSchool of Earth Science(地質・古生物・地球物理・考古学)の一つで, 地球物理と一緒にジオサイエンスビル(写真11)に入っている。正面には金鉱山からのリーフの磨き板がはめ込まれている。学生数は博士課程15人, 修士課程17人, 4年生26人, 3年生19人, 2年生31人, 1年生41人である。学部学生には最初から地質専攻の学生と, 理学専攻で入学し地質に移る学生とが含まれる。

建物は4階建てで, Lower Ground Floorには

Museumが有り, スタッフの会合にも使われる(写真12)。また10時と3時のティータイムにはここに集まって紅茶とコーヒーを飲み, 歓談の場となる。標本室には卒業生や鉱山会社からの寄付で素晴らしい標本があったそうであるが, 1971年に窃盗団により主要な標本は全て盗まれてしまいその後の追跡も不可能という。真に残念である。別館の古生物学科では最近“古生物標本館”が改装オープンした。ダイナソア化石の収集で有名である。

1994年の選挙で何が変わったかと複数の友人達に尋ねた。いろんな感想が聞けたが, 規制緩和に集約出来そうである。南アは元々保守的で清潔な国を目指していたが, 新政権となってポルノが解禁となり, ヨハネスブルグの大通りにも露店が並び, ほかのアフリカ諸国と変わらなくなったと友人達は嘆く。大統領の誕生日に恩赦で釈放された模範囚が数週間後にまた殺人を犯した話も聞いた。しかしウィッツ大に在るかぎり, 安全は保障され学生たちは明るく元気で, 快適な生活を送っているようであった。

ISHIHARA Shunso (1998) : Geology Departments of South African universities, particularly of Wits University.

<受付: 1998年8月20日>



南アフリカ共和国の国花 キングプロテア (King Protea)。